『イエスを巡るジレンマ』ヨハネ7:25-31

7:25 さて、エルサレムのある人たちが言った、「この人は人々が殺そうと思っている者ではないか。
7:26 見よ、彼は公然と語っているのに、人々はこれに対して何も言わない。役人たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知っているのではなかろうか。
7:27 わたしたちはこの人がどこからきたのか知っている。しかし、キリストが現れる時には、どこから来るのか知っている者は、ひとりもいない」。
7:28 イエスは宮の内で教えながら、叫んで言われた、「あなたがたは、わたしを知っており、また、わたしがどこからきたかも知っている。しかし、わたしは自分からきたのではない。わたしをつかわされたかたは真実であるが、あなたがたは、そのかたを知らない。
7:29 わたしは、そのかたを知っている。わたしはそのかたのもとからきた者で、そのかたがわたしをつかわされたのである」。
7:30 そこで人々はイエスを捕えようと計ったが、だれひとり手をかける者はなかった。イエスの時が、まだきていなかったからである。
7:31 しかし、群衆の中の多くの者が、イエスを信じて言った、「キリストがきても、この人が行ったよりも多くのしるしを行うだろうか」。

●序論
今日、ジレンマという言葉を使いました。
その意味するころは、「2つの相反する事柄で板挟みになり、窮地に追い詰められる状況」というものです。
ん？今日読んだところのどこに、そういうジレンマがあるのか？と思われるでしょうか。

そのジレンマというのは、イエスさまをメシア(救い主)として信じるか信じないか…ということです。
　ただそれだけなら、選択に自由があるんだから、どちらを選んでもいいし、あえてそんなに重くとらえなくてもいいんじゃない…と言われるかもしれません。

ただ聖書は、わたしたちにそうは語らないのです。
　3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。
　3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。
　神さまの思いはシンプルで、そしてはっきりしています。それはわたしを救うため･･･と聖書は語るのです。

●本論
Ⅰ．人々の評価を観察して

　人について。信頼するべき人かどうか、周囲の人の評判を意識するということは、ある

意味では大切なことでしょう。
今日お読みしているところには最初にその様子が描かれています。

7:25 さて、エルサレムのある人たちが言った、「この人は人々が殺そうと思っている者ではないか。
7:26 見よ、彼は公然と語っているのに、人々はこれに対して何も言わない。役人たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知っているのではなかろうか。

「エルサレムのある人たち」は、そこにいた一般人です。彼らの話題は、最近評判の若い教師、今目の前にいるイエスという人についてでした。
たしかに、ユダヤ人の指導者たちには、彼を殺そうという動きがあるということも彼らにも伝わるほどだったとわかります。
しかし気になるのは、このイエスが人々の前で公然と語っているのに、あの指導層の人たちはは、それに対して何も言わない。もしかしたら彼らは「イエスがキリストであることを本当は知っているのではないか」といううわさが立ち始めたのです。
知っているのに、あえてそう言わないのは何かしらある…と。
評判にたよることは決して悪いことではありません。けれどもどこか他人事というところに自分をおく。そこからでは見えない、わからないことがあることも知らなければなりません。

Ⅱ．イエスをどれだけ知っているか

7:27 わたしたちはこの人がどこからきたのか知っている。しかし、キリストが現れる時には、どこから来るのか知っている者は、ひとりもいない」。

彼らが、イエスさまの出身地を彼らなりに知っていたということは事実です。
わざわざ彼らがそれを口にした理由は、イエスは自分たちと同じじゃないか。いや言えば田舎者だ。だからイエスはキリストじゃないでしょう！？ということでした。
キリストが現れる時には、それは、隠れたた救い主として神秘的な突然の現れとなるはずだ…、だから違うということです。

そんな彼らの思いを知ってイエスさまは叫んで言われたとあります。

7:28 イエスは宮の内で教えながら、叫んで言われた、「あなたがたは、わたしを知っており、また、わたしがどこからきたかも知っている。しかし、わたしは自分からきたのではない。わたしをつかわされたかたは真実であるが、あなたがたは、そのかたを知らない。

「あなたがたは、わたしを知っいる、どこから来たかも知っている」という言葉で始まるイエスさまの叫びの言葉は、「しかし」という言葉で次に、彼らが知らないでいる、いや認めようとしないでいる事実に目を向けさせます。
それは、「わたしは自分から来たのではない。わたしを遣わされた方は真実だ」と、

ここで、イエス様はご自分を自分勝手にこの地に来たのではない。
お遣わしになった父なる神さまがいる。この方の意思に目を向けさせるのです。

イエスさまがを繰り返して述べていていることを民もよく聞いてきました。
6:38　わたしが天からくだってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。

「天から」そして「（父なる神さまから）遣わされて」と、あるとおりです。

そしてここで、さらにイエスさまはこう言うのです。
:28-29　しかし、わたしは自分からきたのではない。わたしをつかわされたかたは真実であるが、あなたがたは、そのかたを知らない。
わたしは、そのかたを知っている。わたしはそのかたのもとからきた者で、そのかたがわたしをつかわされたのである」。

この言葉は、そこにいたユダヤ人たちの一番聞きたくない人からの言葉でした。
この後、彼らはこれまでと同様の反応を示しました。
:30 そこで人々はイエスを捕えようと計った･･･　。

わたしはその時代に、自分もその場にいて、すなおにイエスさまこそ救い主だと信じることができただろうか？　そしてこれまで何度も申し上げたように、わたしは果たして、イエスさまに「教えられやすい人であろうか」と問われるのです。

Ⅲ．そこで信じる人となる

: 7:30 そこで人々はイエスを捕えようと計ったが、だれひとり手をかける者はなかった。イエスの時が、まだきていなかったからである。

ヨハネの福音書で繰り返し、イエスさまがだれから遣わされているのか。何をしようとしているのか。何を目的としているのか？を繰り返し述べていることを見ています。
それを一言で言うならば、「イエスの時」という表現であることも見てきました。
それは、キリストが十字架につけられ、すべての人の罪の贖いとして死なれる時です。その時をイエスさまは一心に見つめて、この地上生涯を歩んでおられました。
出会うひとりひとりの罪を見、それを思い、それを背負い、そして慈しみをもって、福音を語ってこられたのです。
それが父なる神の御心、そして自分のにゆだねられた歩みだと。
6:40　わたしの父のみこころは、子(イエス)を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。わたしはその人々を終わりの日によみがえらせるであろう。

ここにこのイエスさまを信じた人が記されています。

7:31 しかし、群衆の中の多くの者が、イエスを信じて言った、「キリストがきても、この人が行ったよりも多くのしるしを行うだろうか」。

彼らはイエスさまを通してただの奇跡ではなく「しるし」を見ました。それはキリスト(救い主)としての証しをあらわすしるしです。

信じた人々は、イエスさまに心を開いたのです。

さいごに）

わたしは今日のタイトルに「イエスを巡るジレンマ」というタイトルを上げました。

たしかにイエスさまを信じることは、ある人にとっては、人生の一部分という理解でとどまる方もいらっしゃるかもしれません。

そこでは、それほどのジレンマ(葛藤)は感じはしないかもしれません。

わたしはフッとこんなメモを残していて、それを何度も見返しながら備えました。

イエスさまを巡って、本来はジレンマを感じるべき。
「キリストを失えばすべてを失う」と。

イエスさまが十字架の受難の道を歩まれる時、まさにジレンマを経験し祈られたことがあのゲッセマネの祈りに記録されています。それを愛をもって克服されたイエスさま。

このイエスさまと共に歩みたい。そしてわたしにゆだねられた御心を行う者となりたい。イエスさまに教えていただき、もっとイエスさまを知りたいという願いです。

16:24 それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。
16:25 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。

わたしたちと共に歩んでくださる方は、わたしたちのために命をも捨ててすべての苦しみを負われたイエス・キリストです。この方を信じ、この方につながり続け、この方と共にある歩みを進めてまいりましょう。